

## 五文字

私の同級生には A 君という障害をもっている子がいます。A 君は普段、私たちとは違う、特別なクラスで生活しているため、どんな子なのかよく知りません。でも、特別学級にいるのだから、A 君には特別優しくしてあげるのがいいと思っていました。

夏になると私たちの学校では男女に分かれて、学年全員でプールの授業を行います。その時は A 君も一緒になるので、たまにしか会わない分、私たちはとても気を遣って接していました。

みんなの助けがないとやっぱり何もできないのだろうなと思っていました。

あるプールの授業の日、A 君がいつまでも帰らず、下駄箱の前でそわそわしていました。話を聞いてみると、誰かが A 君の上履きをはいていってしまったらしいのです。その時の私は、「障害があるのだから、自分が助けてあげないと！」と思いました。

残っていた上履きを持ってクラスを回ってみると、やはり、間違えて A 君の上履きをはいている子がいました。私はその子に上履きを渡し、A 君に返してくるよう言いましたが、その子は、「なにを話せばいいかわからないから代わりに届けてきて」と言ってきました。私は押しつけられた気がしてムッとしましたが、無事に解決して、「助けてあげられてよかったな」という達成感のほうが強かったので、届ける役を引き受けてあげることにしました。私は上履きを持って A 君のクラスに行きました。普段の私なら A 君に気を遣って先生に渡していたと思いますが、その時の私は達成感があったので、つい普通に「あったよ」と声を掛けていました。すると A 君は、

「ありがとう」

と、普通に返事をして、笑顔を見せてくれました。その瞬間、私はうれしいと思うと同時に、なぜか胸がドキッとするような何も言えない気持ちになりました。

家に帰ってからも、私はなぜこんな気持ちになったのか考えてみましたが、答えは次の日のプールの授業でわかりました。皆は昨日までと同じように、これから何をするのか丁寧に教えてあげたり、補助してあげたりして、A 君に群がっていました。しかし私は、もしかしたらそれはいらぬおせっかいなのではないかと思いました。

だって、A 君は僕たちと変わらない仲間だから。

私は昨日、A 君が私たちと同じように話し、笑い合うことのできる、一人の友

だちであることを知りました。私は、A君にも同じように、私たちのことを友だちだと感じてほしいと思うようになりました。そのためには、私たち全員が、「障害者はどんな時でも優しく補助されなければいけないもの」という固定概念を捨て、お互いを支え合うことのできる一人の仲間として接することが大事だと、私は考えます。

「おようぜ」

私は、A君に短い言葉を投げかけました。A君は、やっぱり何も言いませんでした。でも、昨日と同じ笑顔でにっこり私に笑いかけてくれました。

私の一言が、A君にとってどんなものだったかはわかりません。しかし、私はこの五文字がA君にとっても、周りのみんなにとっても、意味のある一歩につながったと信じたのです。

たった五文字の言葉が、僕の世界を変えたように。